2025年３月発行

人・まち・地球が好きだから「RERA」仲間この指とまれ

きたくRERA(リラ)Times VOL.10

NPO法人北区リサイクラー活動機構　HP：www.kitakurecycler.or.jp

私たちは、SDGs 目標達成に向け、限りある地球資源を引き継いでいくため、地球環境の負荷を減らすライフスタイルへの転換をめざし、地域で行動していきます。

HPはこちら

アーカイブ

学校給食生ごみリサイクル

初代理事長
故竹腰里子さん

かつて、北区リサイクラー活動機構は、区と一緒に「学校給食生ごみリサイクル」を実践していました。給食の残りを、堆肥にして、いい土を作り、有機野菜を栽培して、エコー広場館で販売していました。始めたのが 1993年ですから、「食のリサイクル」の先鞭を付けたといってもいいでしょう。もう30年以上前のことです。

残念ながら、2021年３月でこの事業は中止となりましたが、これからは“地産地消”を目指した次世代の「食のリサイクル」に取り組んでまいります。そこで、今号では、初代理事長竹腰里子さんの手記より「学校給食生ごみリサイクル」のアーカイブをひもといて、当時を振り返ってみましょう。

生ごみ処理機を全校に！

１９９３年に給食生ごみの堆肥化を始めたころは、北区は人口３０万人、１５万世帯ほどあり、小学校４４校、中学校２０校がありました。学校給食の生ごみ堆肥化は、堆肥化までは北区が担い、私たち北区リサイクラー活動機構は北区の姉妹都市、群馬県甘楽町との食の循環、交流活動を担っていました。堆肥化のきっかけは、一つには学校も事業所として学校長の責任でごみ処理をしなければならないというごみの減量化がありました。もう一つは、再資源化できるものは資源化ルートに乗せてほしいとの東京都の指導によるものです。

同年に、区内の小中学校に学校給食の生ごみ処理機の設置計画が持ち上がりました。ごみの減量、ごみ処理経費の減少も大切ですが子供たちに見えるところでの生ごみ堆肥化は環境教育に一石二鳥との当時の区長の決断により、１台３００万円の生ごみ処理機が導入されることになりました。

小学校の校庭で有機野菜を販売

学校関係者で検討委員会を設置し内容を検討しました。北区の取り組みは大変早かったので、参考になるデータが少なく大変だったようですが、各機種の処理能力や減量効果、処理機内の発酵状態及び脱臭能力、設置後のランニングコストなどが検討されました。小学校と中学校２校に１機ずつ約１年間試験をしました。その結果、使いやすさを優先し、２機種が選択され、６４校全校に３年間で設置しました。

生ごみ処理機は置き場所が大変難しく、住居に近いと音がうるさいこともあり、校庭の片隅に設置されています。北区でスムーズに機器導入が図れたのは、現場の調理師の理解や栄養士の熱意が大きな力となったからです。

（裏面へ）

校庭の片隅に設置されました

■アドレスは recycler3196@outlook.jp　皆さまからの提案をいつでもお待ちしています。

（表面より）

生ごみが7分の1に

学校給食の生ごみは、午後3時頃に各学校に設置された生ごみ処理機に入れます。すると好気性の微生物により、高温高湿で生ごみは堆肥化されます。ほぼ24時間で約7分の1に減量されます。2～3日を経て麻の袋に入れます。

非常にサラサラした堆肥（コンポスト）になりますが、学校の菜園などで使う場合は上のほうに撒くとねずみが食べてしまうので、深く入れるようにしています。

サラサラした生ごみ堆肥

小学校では一人1日約80g、中学校では約110gの生ゴミが出ます。給食のある日が年間約200日、生徒数が小学生約1万2千人、中学生約5千人ですから、計算すると年間に286～300トン近くの生ごみが出て、これが7分の1に減量されます。

できたコンポストは、当初はキウイフルーツの根元に入れたりして学校菜園や花壇に使っていました。コンポスト化によってごみが減量され、ごみ処理の経費は削減されます。でも、それだけではありません。子どもたちの見えるところでの生ごみの堆肥化は、子どもたちが食の大切さを学ぶことにもなり、また、微生物の存在と活動を知ることにもなります。まさに「一石三鳥！」の教育効果が期待できるのです。

午後3時頃に生ごみを入れます

平成のリサイクル便

コンポストは、学校で全部使ったり、余れば近所に配ったりしていましたが、出来る学校とそうでない学校とがあります。せっかく出来たコンポストを土に返したいという思いがあり、コンポストの利用についてリサイクル生活課と相談して、有機野菜の栽培にコンポストの活用を考えました。しかし、残念ながら北区には農家がほとんどありませんでした。

私たちは、学校の栄養士たちと、区と交流のあった群馬県甘楽町に行き、コンポストが使えないか打診しました。初めは有機農業研究会から「北区のごみを甘楽町に持ち込むのか！」と反対の声もありましたが、意見交換する中で、甘楽町では、有機野菜を甘楽の顔にしたいということで、コンポストを使ってもらえることになりました。

甘楽町はのどかなよい町です。ここでできた野菜は、そのまま採って食べても安全でおいしいです。そこで、生ごみの堆肥を使ってもらうだけでなく、農作物を購入して初めて資源循環になるということで野菜を購入することになり、トラックの往復が始まりました。

昔は埼玉県辺りから野菜を積んできて、その帰りに下肥を積んで帰ったと聞いていますが、私たちの活動は正に『平成のリサイクル』となりました。つくり手と使い手の顔の見える素晴らしい活動が始まったのです！

「野菜のりさいくる」平成のリサイクル便です
写真は『日本農業新聞』1996年3月22日より

SDGsシネマ「明日塾」（3月22日開催）「食べることは生きること」の講師、コンポストアドバイザーの美喜子さんの近況をお知らせします。美喜子さんは渋谷区でコンポストを使ってコミュニティガーデンを作る活動をしています。

2月14日、都心の真ん中の1,500㎡の空き地を、ほんとに畑にできることになりました。 原宿、表参道、外苑前駅の真ん中あたりの場所です。
ただし、1年間だけ。
渋谷、原宿、表参道というインパクトのある場所から【土に触れ、つながりと野菜を育てる】活動を発信し、植物や小さな生き物の声を聴き、周りの方々と共に元気に活動して参ります。